

きゅうり接木苗の取扱いに関する試験

和泉昭四郎・川村邦夫

(宮城県農試)

1. ま え が き

きゅうりの接木苗は蔓割病に対する抵抗性が顕著で、更に耐低温性も強くなることも認められているが、接木育苗は一般の育苗より、接木分だけ余分な労力を要するので、接木苗の有効な利用方法が必要と考え、接木苗の取扱方法特に子蔓2本仕立とした場合の生育、収量、品質に及ぼす影響について検討したので、その結果を報告する。

2. 試験方法

供用した台木は芳香青皮栗南瓜、きゅうりは青緑、播

種は台木が1月20日、きゅうりは2月1日、接木は2月10日に行い、定植は3月25日にビニールハウス内に3.3㎡当り、1区と2区は12株、3区は6株植えとした。

試験区別は1区標準(普通苗)、2区接木親蔓1本仕立、3区接木子蔓2本仕立の3区を設け、1区4㎡(1区、2区20株、3区10株)の3回反覆とした。

3. 試験結果

1. 生育状態。第1表の通り生育全期に亘り、接木親蔓1本仕立区が草丈、展開葉数共に優れ、次いで無接木の標準区、接木子蔓2本仕立区の順で接木子蔓2本仕立区が劣る傾向が認められた。

第1表 生育調査

区 別	定植時の苗		4月10日		4月30日		5月30日		7月20日		播種から収穫までの日数	収 穫 期 間
	草 丈	展開葉	草 丈	展開葉	草 丈	展開葉	草 丈	展開葉	草 丈	展開葉		
1区 標準	11.1 ^(cm)	3.9 ^(枚)	32.2	7.2	92.1	16.3	223.3	36.5	584.7	71.7	85	86
2区 接木親蔓1本仕立	15.4	4.7	34.8	8.2	95.9	17.1	223.7	35.5	632.8	75.6	82	89
3区 接木子蔓2本仕立	9.2	4.0	11.4	4.7	58.7	8.0	200.8	24.8	603.9	64.8	82	89

注 定植期 3月25日 収穫始期 1区4月26日 2区、3区4月23日、 収穫打切7月20日

2. 雌花の着生及収穫果率。第1雌花の着生節位は第2表に示す通りで、標準区が2.5節、接木親蔓1本仕立区が1.3節、接木子蔓2本仕立区が1.4節、各区共に下位節位からの着生が見られた。連続雌花の着生は標準区が5.7節、接木親蔓1本仕立区が3.6節、接木子蔓2本仕立区が1.4節で、株当たり雌花着生率は、標準区93.4%、

接木親蔓1本仕立96.6%、接木子蔓2本仕立97.2%と接木苗区は親蔓1本、子蔓2本仕立共に高い雌花着生率を示した。

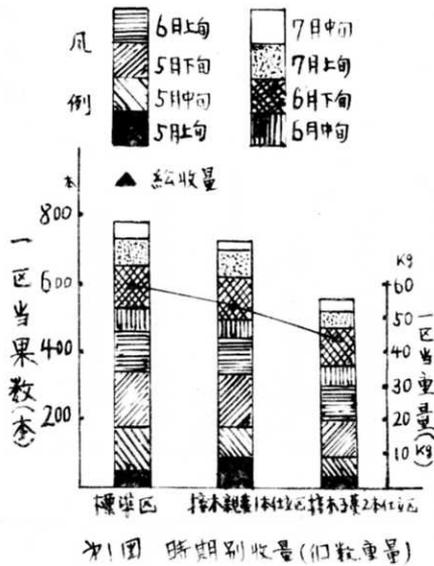
雌花着生に対する収穫果率は標準区の57%で最も高く、次いで接木親蔓1本仕立区の50%、接木子蔓2本仕立区の44%で、接木子蔓2本仕立区がやゝ劣る傾向が見られた。

第2表 雌花着生及収穫果率

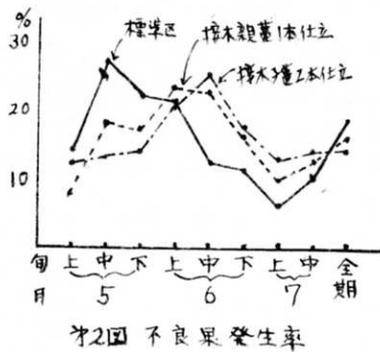
区 別	第1雌花着生節位	連続雌花着生節位	株当たり総雌花数	同 左着生率	株 当 り 収 穫 果 数	総雌花数に対する収穫果率	収穫最盛期の収穫部位	
							葉 巾	葉 長
1区標 準	2.5	5.7	67	93.4	38.2	57	24.1	18.7
2区接木親蔓1本仕立	1.3	3.6	73	96.6	36.1	50	24.1	18.6
3区接木子蔓2本仕立	1.4	1.4	63	97.2	27.8	44	23.4	18.7

3. 時期別収量、収穫ははじめから打ち切りまでの収量は第2図に示す通りで、5月10日までの収量は接木親蔓1本仕立区が優れ、次いで標準区、接木子蔓2本仕立区の

順であるが、5月10日以後の収量は標準区が優れ、接木親蔓1本仕立区、接木子蔓2本仕立区の順で、特に接木子蔓2本仕立区は全期を通じ劣る傾向が見られた。



第1図 時期別収量(個数重量)



第2図 不良果発生率

4. 不良果の発生、第2図の通りで、5月下旬までは標準区が発生多く、次いで接木親蔓1本仕立区、接木子蔓2本仕立の順に少い傾向を示したが、6月上旬以降は接木親蔓1本仕立区、接木子蔓2本仕立区が多く、標準区が少く、5月下旬以前と全く反対の傾向が見られた。

全期に通じては標準区が多く、次いで接木親蔓1本仕立区、接木子蔓2本仕立区の順に少い傾向が見られた。

3. 考 察

また接木親蔓1本仕立区は5月上旬迄の収量が最も多

くなっているが、これは接木によつて耐低温性が強くなつたことにより、標準区より優れたものと思われる。

接木子蔓2本仕立区は全期を通じ生育の遅延と減収が見られたが、これは生育初期の摘芯による生育遅延と、雌花着生が低節位からで、それが着果肥大し、負担果が生育初期から増大したための影響が大きかつたものと考えられる。

しかし6月上旬以降は標準区が優れ、接木親蔓1本仕立、接木子蔓2本仕立区共に劣つている、このことは果樹に於いては一般に接木苗の生育は抑制される場合の多いことが認められ、またそ採に於いても千葉農試の石橋氏はトマトについて同様な結果を報告し、きゅうりでも観察されたと述べているが、本試験でも同様な抑制現象が観察された。

不良果の発生は5月上旬までの比較的低温期間は接木親蔓1本仕立区、接木子蔓2本仕立区共に標準区に比し発生が少い傾向を示しているが、これは接木によつて耐低温性が強まつたためと考えられる。また6月上旬以降の温度的に恵まれた時期には低温期と反対に接木苗の親蔓1本仕立、子蔓2本仕立区共に標準区よりやゝ発生が多い傾向にあるのは判然とした原因は不明であるが、接木による抑制作業の影響とも思われる。

以上の結果、接木子蔓2本仕立は栽植本数は標準区や接木親蔓1本仕立に比し2分の1の本数で足りるが、収量は早期及全期共に親蔓1本仕立区より減収が甚しかつた。

しかし雌花の着生は極端な差は見られず、雌花着生率では処理区間中最も優れ安定していたが、雌花着生に対する収穫果率が劣つていることが見られた。

収穫果率の低い原因は観察では雌花が開花後に不完全發育果に終るものが多かつたためである。

接木子蔓2本仕立の実用化にあつてはこの雌花の開花後に不完全發育果に終るものを少くして収穫果率を高める検討を行なう必要がある。

セルリーの栽植密度に関する試験

伊 藤 智

(宮城県農試岩沼分場)

セルリーの需要は年々増加の傾向にあるが、まだまだ一般野菜としての消費は少く、又栽培も少い、これは人によつて非常に好き嫌いが強くなじみにくい野菜であることにも一因はあるが、価格が高いのでまだまだ高級野

菜であると云う觀念が強く、このことも大きな原因の一つであると考えられる。しかしこうした種類の生食野菜については、これを大衆化すると云うことも重要な課題であり、消費者が購入し易い程度のもを、必要量生産する